

氏名 (生年月日)	趙 軒 求 (1977 年 4 月 5 日)
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	文博甲第 93 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 20 日
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	大江健三郎論 —物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を視座として—
論文審査委員	主査 宇佐美 毅 副査 関 礼子 小森 陽一 (東京大学大学院総合文化研究科教授)

#### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

##### 1. 本論文の目的と構成

最初に本論文『大江健三郎論—物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を視座として—』の目的と構成を示す。

本論文は、大江健三郎作品を「あいまいさ (アムビグイティー)」という観点から考察したものであり、それを論者は「ヘテロ的な特性」として意味づけようとしている。

大江健三郎における「あいまいさ」と言えば、ノーベル文学賞受賞講演が当然のことながら思い起こされる。そこで、大江は川端康成のノーベル文学賞受賞講演「美しい日本の私」を意識した上で、「あいまいな (アムビグアス) 日本の私」と題する受賞講演をおこなった。大江はその講演の中で、その「あいまい」は「vague」ではなく「ambiguous」であると規定している。大江の言う「あいまいな日本」とは伝統と西欧化、民主主義とそれとは異なる原理などの多くの二面性に引き裂かれた日本のありかたを示したものであり、大江はそれを自己規定としてこの講演で示している。「開国以後、百二十年の近代化に続く現在の日本」が「あいまいさの二極に引き裂かれている」と述べ、その引き裂かれた「現在の日本」が「痛みと傷から癒され、恢復すること」をもとめて、そのために「文学的な努力を続けて」きたと述べている。

このような大江の自己規定があるものの、大江の初期小説は実存主義的な解釈から意味づけられてきた。たしかに大江自身が実存主義の影響を受けて作家として出発した面があり、当時の日本社会が第二次大戦後にフランスから流行した実存主義の影響を受けていた時期でもあって、大江の初期小説に対する実存主義的評価がカノン化されていった。そのようなカノン化の結果として、大江における批評と文学研究は読者を物語そのものに導くことができなかつたと論者は指摘している。すなわち、そうしたカノン化によって物語内容と物語言説における「あいまいさ」を解明せず、「あいまいさ」のままにしておいたので大江の小説は読みにくい小説として扱われ、その読者層を広げ

ることができなかつたというのが、本論文の根底にある論者の問題意識である。

「あいまいさ」は多様な意味を内包しており、多様な意味とは「ある語が二つないしそれ以上の異なる意味を持つこと」を指す。つまり、「あいまいさ」はヘテロ (hetero) 的な特性から生まれており、大江が小説の方法的な枠組みを構築すればするほど読者が読み取らなければならないヘテロ的特性も多くなり、その結果として、大江の小説を読んできた読者は徐々にその物語内容と物語言説から距離を置くようになる。そして、大江作品は新たな読者の獲得にも失敗してしまう。

このような観点から、本論文では大江の小説に含まれるヘテロ的な特性を物語内容と物語言説から抽出していくことを目指している。特に、物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性が「あいまいさ」として変奏されていくあり方を考察している。

そのような意図から、本論文は、大江がデビューした一九五八年から小説家として「しめくくりの小説」と宣言した三部作『燃えあがる緑の木』が刊行された一九九五年にわたるまでの小説を系統的・通時的に論じたものではない。論者がここで試みたのは、大江作品の物語内容と物語言説における「あいまいさ」をヘテロ的な特性を持つ物語構造として読み解くことであり、この点为本論文の全体にわたる課題となっている。

\*

以上のような目的を果たすため、本論文は以下のような構成がとられている。

序——物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を論じるにあたって

第一部 物語内容におけるヘテロ的な特性

—「別の世界」、そのヘテロ的な特性への可能性を中心に—

第一章 『鳥』論

—「かれ」における三つの「ズレ」を中心に—

第二章 『空の怪物アグイー』論

—非日常の実体化がもたらすヘテロ的な特性—

第三章 『万延元年のフットボール』論

—「ヘテロトピア (hetero-topia)」の構築—

第二部 物語言説におけるヘテロ的な特性

—「ヘテロトピア」から「異質物語世界的物語言説」へ—

第四章 『ピンチランナー調書』論

—二項的な物語構造を物語言説の交差から読み解く—

第五章 『懐かしい年への手紙』論

—「異質物語世界的物語言説」における語り手の混在—

第三部 ヘテロ的な特性から大江健三郎を読み直す

—韓国文学の危機に関する比較文学からの一考察—

第六章 大江健三郎と崔仁勲のトポスにおける小説の方法

—『万延元年のフットボール』と『広場』を中心に—

第七章 大江健三郎と村上春樹の作品における「僕」の物語言説比較

—『懐かしい年への手紙』と『ノルウェイの森』を中心に—

終章

## 2. 本論文の要旨

本論文では全体を三部に分けて考察を進めている。まず、第一部（第一章～第三章）は初期から一九六〇年までの作品を中心に物語内容におけるヘテロ的な特性としてトポスの問題を取りあげて論じている。次に、第二部（第四章～第五章）は一九七〇年代から一九八〇年代にかけての作品を物語言説におけるヘテロ的な特性、つまり「僕」という語り手が語る「異質物語世界的」

(hetero-diegetic) 物語言説という観点から考察している。そして第三部（第六章～第七章）は比較文学の領域として大江と崔仁勲、大江と村上春樹を比較し、その上で、韓国の読者が大江をどのように受容すべきであるのかに対して、提案をおこなっている。

以下、各章の内容を要約しておく。

第一部では物語内容におけるヘテロ的な特性について論究している。第一章の『鳥』(一九五八年)論は日常から非日常に変わるトポスの転倒に注目している。それによって従来の実存主義的解釈から脱して、大江が日常と非日常の境界を語っていく境界意識を抽出し、この作品に大江の多様な試みがあることを見ようとしている。第二章は『個人的な体験』(一九六四年)と結びつけて研究されてきた『空の怪物アグイー』(一九六四年)を、『個人的な体験』との関連性は維持しながらも、『空の怪物アグイー』の前作である大江の初期作品との類似性に注目して論究している。それによって、大江作品を実存主義から構造主義、そしてポスト構造主義につながるという西洋哲学史的な説明から脱して、ヘテロ的な特性を中心とする見方に読みかえるという見解を提示している。第三章は『万延元年のフットボール』(一九六七年)論である。先行研究では、物語内容として歴史を取り入れたことと「四国の谷間の村」にユートピア的志向があることについて主に論じられてきた。これに対して論者は、「四国の谷間の村」に呼び戻される蜜三郎と鷹四兄弟の移動を追っていった結果、谷間の村がユートピアではなくヘテロトピアであると解釈している。これらの三つの分析によって、大江の小説の物語内容に起因する二項的なトポスの対立関係をヘテロトピアにおける混在として置き換えている。今まで「谷間の村」と「都市」という二項構造は、一つのトポス(谷間の村)が「根拠地」として構築され、その「根拠地」に対する「異化」として他のトポス(都市)が対照を成していると解釈されてきた。その結果、二項的なトポスは対立する構造として、ユートピアとアンチ・ユートピアを志向する。それに反して論者は、「根拠地」に登場人物たちを呼び戻す物語内容に着目し、登場人物たちが両極のトポスを移動することによって、「谷間の村」と「都市」が物語内容として混在されていく様相を考察している。さらに、ユートピアとアンチ・ユートピアにおける対立を二項的なトポスの移動に伴うヘテロトピアという解釈に置き換えることで、物語内容が生み出す「あいまいさ」を確認している。そしてこの「あいまいさ」が物語内容を読み解く読者の位置まで混在

させてしまったという結論を導き出している。

第二部は『ピンチランナー調書』（一九七六年）と『懐かしい年への手紙』（一九八七年）に共通する「等質物語世界的」（homo-diegetic）物語言説から脱構築化されている「僕」という語り手に注目している。つまり、物語言説におけるヘテロ的な特性を語り手の変化から読み解いている。第一部で論究した「谷間の村」と「都市」という両極のトポスが混在することによって、「僕」の物語言説的な位置も、「語る」と「語られる」という二項的な構造とは異なる関係になる。つまり『ピンチランナー調書』と『懐かしい年への手紙』から読み取れる「僕」の物語言説は、ヘテロ的な特性を持つ「あいまいさ」を含んでいる。したがって、「僕」の物語言説はトポスとして時間をも表象できるし、それによって「谷間の村」と「都市」、過去と現在は「僕」の経験として記憶される。こうして、「僕」は物語内容としてヘテロトピアを語り、次第に大江は「僕」が混在する「あいまいな」世界を物語言説として構築していった。それに対して、現実の異化としか読み取れない既存の読者は、ヘテロトピアの世界観が溢れる大江の小説から物語言説自体を読み取り難くなってしまふ。さらに「僕」の物語言説を「異質物語世界的」言説として読み取ることができる読者をも獲得できなかったと指摘している。そして、その結果、大江の作品を社会的言説の枠組みに限定して解釈することが、大江に対する評論や研究のカノンになってしまったとこの章を結論づけている。

最後に第三部では、トポスと語り手に分けて解明した第一部と第二部の結果を用いて、比較文学的な視点から大江の「あいまいさ」について論究している。そのプロセスとしてまず、第六章ではトポスのヘテロ的な特性から大江の『万延元年のフットボール』と韓国の崔仁勳の『広場』（一九六〇年）を比較している。大江の小説における「あいまいさ」を理解するという問題は、ヘテロトピアを韓国における社会的言説（グランド・ナレーティブ）の枠組と結びつけて理解するという可能性を切り開くことになる。その問題を明確化するために、論者は大江と同時代の作家である崔仁勳を登場させている。大江と崔仁勳、そしてトポスの移動という視座を取ると『万延元年のフットボール』と『広場』には、サルトルの実存からフーコーのヘテロトピアへ繋ぐ相互関係が見える。それをふまえると『万延元年のフットボール』から読み取れる蜜三郎らの「都市」から「谷間の村」への移動、その移動自体がトポスの混在として機能するのがわかる。そして『広場』も「広場」と「密室」に限定されず、「ソウル」と「平壤」、そして「青い海」が物語内容におけるトポスとして新しく読み取れる。その結果、崔仁勳が韓国という地域的な特殊性に限定されて戦後の実存的なトポスに留まっていた反面、大江はそこから抜け出して普遍的な個人のトポスと歴史的な時間が混在する物語を構築できたことをここで明らかにしている。第七章では、語り手の「僕」におけるヘテロ的な特性について日本と韓国の「村上春樹現象」をかかわらせながら考察している。特に、村上春樹作品より販売部数で劣っていた『懐かしい年への手紙』（一九八七年）と、村上春樹の『ノルウェイの森』（一九八七年）を基軸にして形成された社会的言説に主眼をおいている。つまり、『懐かしい年への手紙』と『ノルウェイの森』を中心に、大江と村上を「対話」させることで、「大江と村上」という「評価の地勢図」を再構築することを目指している。さらに、大江と村上が目論んだ『懐かしい年への手紙』と『ノルウェイの森』における物語言説の異なる方向を区別して読み取ること

で、二つの作品がそれぞれ発信している自己物語としての物語内容をより明確にしている。そのことによって、社会的言説に対する「僕」の物語言説としての抵抗の様相を、日本と異なる方向で形成された韓国での受容との比較から読み解くことができたまとめている。

### 3. 本論文への評価

本論文は多くの点で研究史的な意義を有している。

第一の意義は、大江健三郎という作家を従来の研究にない方法で意味づけたことである。従来の大江研究では、初期の作品を実存主義的観点から研究し、その後の作品を構造主義的に意味づけようとする研究が多かった。こうした研究が大江研究のカノン化する一方で、大江作品は専門家の評価とは裏腹に多くの一般読者を獲得することができずにいた。本論文は、こうした理解の乖離の要因が大江作品の「あいまいさ」にあるとし、その「あいまいさ」をヘテロ的特性として読み解いている。

本論文では大江の小説を取りまいてる従来のカノン化した研究の基準こそ、大江の小説を繋いで共有する読者を迷わせているのではないかと考えて考察を進めている。論者は、大江の小説を一つ一つ繋いで「星座小説」として読むことで、作品と作品の間に関わっている関係性を考察している。そのような考察の結果、ヘテロトピアは個人的想像力と社会的言説が混在する大江文学における「あいまいさ」を物語内容として表象するトポスである、と解釈することが可能になったといえる。

第二の意義は、大江健三郎の作品を比較文学的にとらえ直し、「世界文学」とリンクさせて考察したことである。第一部の物語内容レベルにおけるヘテロ的特性、第二部の物語言説レベルにおけるヘテロ的特性を論じた本論文は、第三部において大江作品を比較文学的に考察することで、第一部と第二部を発展させている。その第三部において論者は韓国における大江作品の受容を論じ、そこで韓国の作家である崔仁勲と大江の作品を比較し、さらには村上春樹と大江の韓国における受容を比較している。それによって、大江作品の世界的な受容の新たな可能性を見出したことは、本論文の重要な成果である。

本論文には他にも多くの評価すべき点がある。大江作品のヘテロ的特性を物語内容と物語言説の両面から考察するという方法が一貫しており、論じる姿勢に少しも揺れがない点は本論文の評価すべき点である。そのヘテロ的特性を、第一章ではミシェル・フーコーを媒介にして論じ、第二章はジェラルド・ジュネットを媒介にして論じるという構成もきわめて意識的であり、本論文の姿勢を明確に示すものとして重要である。

このように、本論文は従来の大江研究にはない新しい発想から考察を進めており、研究史においてきわめて重要な意義を持つ論文として高く評価することができる。

#### 4. 本論文の課題

本論文は、前章に示したような多くの意義が認められる反面、いくつかの課題も指摘しておきたい。

第一に、大江健三郎の作家としての軌跡の一部しか考察の対象にしていないこと。大江のように長い作家生活を送り、多くの作品を発表した作家の全体を博士論文にまとめきることはもともと困難なことではあるが、本論文はまだその全体像の一部しか論じることができていない。触れていない作品も多く、それについては今後の課題として残されている。

第二に、論じた作品においてもまだ考察すべき課題が残されていること。これは本論文の長所と一体でもあるのだが、全体の考察の姿勢を一貫させ、研究方法に常に忠実であろうとするあまり、そこから関連して見えてくる多くの課題に今回は対応できなかったことが指摘できる。せっかく重要な課題が見えるところに到達しながらも、それをあえて捨象して全体をまとめたことは、論者の構成力を示すものであると同時に、やや惜しまれるところでもあった。

第三に、第一章の物語内容の分析と第二章の物語言説の分析を統合するような章が設けられなかったこと。第三章で大江を比較文学的に考察したことは大きな意義を持つものの、第一章と第二章は現在の第三章とは異なる形で交差させることも可能であり、それがなされていないことはやや物足りないところでもあった。

しかし、こうした課題は最終試験において指摘されたものの、論者はきわめて適切な回答をおこない、これらの課題について自覚的であることを示していた。論者は大きな研究計画を既に持っており、今後韓国に帰国してからの研究活動を視野に入れて、自らの計画に沿って研究を進めていくという方向性を具体的に把握していることが明らかであった。ここに示したような課題は、論者の今後の研究活動の中で真摯に取り組まれ、解決されていくものと考えられる。

#### 5. 結論

以上の点を総合的に考え合わせた結果、審査委員は本論文が研究史的に大きな意義を持つことを認め、全員一致で本論文に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。